明恵撰『摧邪輪』巻中　訓・註　試稿（三）

米澤実江子

【抄録】
承前（『佛教大学　法然仏教学研究センター紀要』第一号・二号）

キーワード：明恵　『摧邪輪』　訓読文　註記

【報告範囲】
「十一丁裏七行目より十七丁表五行目」までを挙げ「試稿」とした。

【凡例】
一、底本は、佛教大学図書館蔵「寛永年間版（準貴重書　G極楽寺／377）」とし、始めに書き下し該当箇所を翻刻し、次に書き下しとその注記（通し番号）を挙げた。
一、翻刻にあたっては、底本の字体を残した。書き下しに際して、通行の字体に改めた。
一、翻刻部、【　】の内、丁数とオ（ウ）を示す場合は、底本の丁数とその表（裏）を指し、漢数字と上（下）を示す場合は『鎌倉旧仏教』本刻部の頁とその上（下）を指す。
一、＜　＞は原割り注。
一、訓読文において、返点・送り仮名は、原則底本に従ったが、送り仮名は適宜補った。
一、訓読文において、典籍引用部は改行して二文字下げた。また引用末の「～云々（云云）」は、「～、と云々（云云）。」とした。
一、訓読文において、明恵の設問とその答えは、それぞれ改行した。
一、注記における引用出典の略称は以下の通りである。
『昭法全』（『昭和新修法然上人全集』）
『浄全』（『浄土宗全書』）
『大正蔵』（『大正新脩大蔵経』）
『望仏』（『望月佛教大辞典』増訂版）
『中仏』（中村元著『広説佛教語大辞典』）
『織田仏』（織田得能著『織田佛教大辞典』）

『大漢和』（諸橋轍次著『大漢和辞典』）
『日国』（『日本国語大辞典』第二版）

〔付記〕
当研究班研究課題の底本として、佛教大学図書館所蔵本を使用させて頂きました。佛教大学図書館のご厚情に感謝申し上げます。

【十一丁ウ　七行】【三四四頁下】
問。既云二慈悲哀愍故一。何依今時経道一乎。答。既云経道滅時一。不云三留二無仏世界一。無仏世界経道不レ行不レ留二念仏一。明知。彼時念仏止住今一時経道興一行之等流也。此約相生因力一辨。慈一悲擧縁一力一。揔言之利生化一儀【十二丁オ】皆无非二慈悲所起一。於法滅時一難可レ化故殊辨縁力一也。

《訓》
問ふ。既に「慈悲哀愍故」と云ふ。何ぞ今時の経道によるや。
答ふ。既に「経道滅時」と云ふ。「無仏世界に留む」と云はず。無仏世界には経道も行ぜず、念仏をも留めず。明らかに知りぬ。彼の時の念仏の止住は、今時の経道興行の等流なり。此れは相生・因力に約して弁ず。慈悲は縁力を挙ぐ。惣じて之を言へば、利生の化儀、皆、慈悲の所起に非ざること無し。法滅の時においては、化すべきこと難きが故に、殊に縁力を弁ずるなり。

註

（1）康僧鎧訳『無量寿経』（『大正蔵』十二、二七九頁上）。
（2）康僧鎧訳『無量寿経』（『大正蔵』十二、二七九頁上）。
（3）「等流」、「等同流出」の意・【仏教語】原因から結果を生ずる際にその結果が原因と同じ性質を持っている時その結果を指して言う・性質が持続すること（『日国』九、一〇六七頁）。因（本）から果（末）を流出する時に因果が相似していること・等しく帰一する・等しい物となる・どこへでも流れていく（『中仏』下、一二五三～一二五四頁）。
（4）「因力」、物が生じるのに正しく原因となる力・「縁力」の対（『中仏』上、九五頁）。
（5）「縁力」、縁の力（『中仏』上、一四九頁）。↓「縁」原因一般・あらゆる条件・間接的原因（『中仏』上、一三五頁）。
（6）「利生」、衆生を利益すること・人々を救うこと（『中仏』下、一七二二頁）。

若依二第三家説一以七萬倶胝獨覺一爲縁一可發二菩提心一雖三為二一乘聖一者一如下上経説二發心諸縁一中云上。或因三親近二善知識一或因悪友等〈云云〉。即親近善友是順縁門。即爲成法因一也。親近悪友是違縁門。即為相違因也。若爲大種姓人一善友悪友倶是二門之發心縁也。不善悪友尚爲縁。何一況於二獨覺聖者一乎。隨其所宜一可レ發二菩提心一。或復彼中多可三有二大菩薩衆一。如二十六聖衆等一多是深位菩薩、現二小聖形一【三四五頁上】護一持佛一法一利益衆生一等是也。

《訓》
若し第三家の説によらば、七万倶胝の独覚を以て縁として菩提心を発すべし。二乗の聖者たりと雖も、上の『経』に、発心の所縁を説く中に云ふがごとし。
或は善知識に親近するにより、或は悪友による、等と〈云云〉。

即ち、「親近善友」は是れ順縁門[10]。即ち成法因[11]とするなり。「親近悪友」は是れ違縁門[12]。即ち相違因[13]とするなり[14]。若し、大種姓[15]の人の為には、善友・悪友、倶に是れ二門の発心縁なり。不善・悪友、尚し縁となる。何に況や、独覚の聖者においてをや。其の所宜に随ひて[16]菩提心を発すべし。或は復た、彼の中に多く大菩薩衆有るべし。十六聖衆等[17]のごときは、多く是れ深位[18]の菩薩、小聖[19]の形を現じて、仏法を護持し、衆生を利益する、等是れなり。

註

(7) 「七万倶胝独覚」、『群疑論』（『大正蔵』四七、四九頁上）。玄奘訳『大阿羅漢難提蜜多羅所説法住記』（[以下『法住記』とする]『大正蔵』四九、一三頁下～）。

(8) 『群疑論』（『大正蔵』四七、四八頁下～四九頁上）。

(9) 『大方便仏報恩経』「第二発菩提心品」（[以下『報恩経』とする]『大正蔵』三、一三六頁中）。

(10) 「順縁門」→「順縁」、順調な恵まれた縁・心にそうこと・善い出来事が仏道に入るよすがになること（『中仏』中、八一九頁）。【仏教語】縁が果とその性質を等しくする時、その縁をいう（『日国』六、一四五五頁）。→「門」、出入りするところ・道理・見方・方法・立場・あり方・差別・教えの仕方・教え（『中仏』下、一六七〇頁）。

(11) 「成法因」、【参考】法蔵『華厳経探玄記』（以下『探玄記』とする）（『大正蔵』三五、四四七頁上）。

(12) 「違縁門」→「違縁」、自ら心に望まない事がら、都合の悪い縁（『中仏』上、三九頁）。

(13) 「相違因」、ものが生じ・存続し・成じ・得られるという場合に、障害となるもののことをいう（十因の一つ）（『中仏』中、一〇五六頁）。

(14) 「順縁門即成法因（中略）違縁門即相違因」、【参考】『探玄記』（『大正蔵』三五、四四七頁上～中）。

(15) 「種性」、生まれつきの性質・修行する人の素質・さとりの種（『中仏』中、七九九頁）。

(16) 「随其所宜」→「随宜」【仏教語】衆生の仏法を受け容れる素質能力に従うこと・その時々の都合や状況に合わせて善いように取りはからうこと（『日国』七、七六四頁）。

(17) 『法住記』刀兵劫の後に出現する十六羅漢（『大正蔵』四九、十三頁下～）。

(18) 「深位」、修行の進んだ高い位（『中仏』中、九三七頁）。

(19) 「小聖」、仏を「大聖」というのに対し、小乗果の聖者および大乗十地までの菩薩（『中仏』中、八六六頁）。

問。然者群疑論三家義中第一家義論破之。後二家義【十二丁ウ】論不評之。今准璟興師解釋論第二家非盡理説。以第三家義可爲盡理説。然者彼時實有浄土教有遺身舎利有護持聖衆。良可為發心勝縁。如第二家義者従人壽十歳至百歳以來既云佛法暫滅。此時以何爲勝縁乎。答。有種姓人於地獄中尚發心。如前出經文。地獄尚然況於人間乎。況復彼時三藏教等雖滅護持聖衆未入無餘。是故聖衆可施冥顯方便。或復舎利從金剛際出現神變出種種法音衆生聞之皆發菩提心得三乗不退之益。

《訓》

問ふ。然らば『群疑論』の三家の義の中に、第一家の義、『論』、之を破す[20]。後の二家の義、『論』に之を評さず[21]。今、憬興師の解釈[22]に准ずるに、『論』の第二家[23]は尽理の説に非ず。第三家の義[24]を以て尽理の説とすべし。然らば、彼の時[25]は、実に浄土の教へ有り。遺身の舎利有

り。護持の聖衆有り。良に、発心の勝縁としつべし。

第二家の義のごときは、人寿十歳より百歳に至らん以来は、既に「仏法暫滅[26]」と云ふ。此の時、何を以てか勝縁とせんや。

答ふ。種姓有る人は、地獄の中において、尚し発心す。前に出す経文[27]のごとし。地獄、尚ほ然なり、況や人間においてをや。況や復た彼の時は、三蔵教等滅すと雖も、護持の聖衆、未だ無余[28]に入らず[29]。是の故に、聖衆、冥顕[30]の方便を施すべし。或が復た、舎利、金剛際[31]より出でて神変[32]を現じ、種種の法音を出だす。衆生、之を聞きて、皆菩提心を発し、三乗不退の益を得。

註

(20)「第一家義」、信行の三階教の説（『群疑論』四七、四八頁上～下）。

(21)「後二家義」、刀兵劫時・『法住記』所説刀兵劫後（『群疑論』［『大正蔵』四七、四八頁下～四九頁上］）。

(22)「憬興師解釈」、『無量寿経連義述文賛』（『大正蔵』三七、一七〇頁中）。

(23)「第二家義」、刀兵劫時（『群疑論』［『大正蔵』四七、四八頁下］）。

【参考】『起世経』（『大正蔵』一、三五三頁中～）。

(24)「第三家義」、『法住記』所説「刀兵劫後」（『大正蔵』四九、十二頁下～）。

(25)「彼の時」、経道滅尽時のこと。

(26)「仏法暫滅」、『法住記』「仏法爾時当暫滅没」（『大正蔵』四九、十三頁中）。

(27)『報恩経』二（『大正蔵』三、一三六頁上～中）。

(28)「無余」、死後に生まれ変えわることがない・無余涅槃・煩悩も肉体も完全に滅し尽くした状態・執着するよりどころのない人（『中仏』下、一六四六頁）。

(29)『法住記』（『大正蔵』四九、十三頁下）。『群疑論』（『大正蔵』四七、四八頁下）。

(30)「冥顕（みょうけん）」、隠れていて見たり聞いたりできないものと、見聞きすることができるものをいう（『中仏』下、一五九一頁）。

(31)「金輪際（金剛輪際）」、大地の下百六十万ヨージャナ（由旬）の所にある金輪の底の意・大地の果て（『中仏』上、五三一～五三二頁）。

(32)「神変」、仏菩薩が衆生の教化のために超人的力によって種々の姿や動作を現すこと・衆生を救うために衆生の能力や素質に従って色々な姿や形に変じること・不思議な力を示すこと・神通（『中仏』中、九七三頁）。

即如悲華經第七説。法炬滅法幢倒正法滅已我之舎利尋没於地至金【十三丁オ】剛際。爾時娑婆世界空無珍寶。我之舎利變為意相瑠璃寶珠其明炎盛從金剛際出於世間上至阿迦尼吒天雨種種華。曼陀羅華・摩訶曼陀羅華・波利質多華・曼殊沙華・摩訶曼殊沙華。有浄光明大如車輪。百葉千葉或百千葉、其光遍照。亦有好香微妙常敷。觀者無猒。其明炎盛不可稱計。微妙之香無量無邊純雨如是無量諸華。當其雨時復出種種微妙音聲。

《訓》

即ち『悲華経』の第七に説くがごとし。

法炬滅し、法幢[34]倒れ、正法滅し已らんに、我が舎利、尋で地に没して金剛際に至らん。爾の時に、娑婆世界、空しくして珍宝無からん。我が舎利変じて、意相、瑠璃宝珠となりて、其の明炎、盛

にして、金剛際より世間に出でて、上み、阿迦尼吒天[35]に至りて、種種の華、曼陀羅華[36]・摩訶曼陀羅華[37]・波利質多華[38]・曼殊沙華[39]・摩訶曼殊沙華を雨ふらさん。浄光明有り。大きさ車輪のごとくならん。百葉・千葉・或は百千葉、其の光、遍く照す。亦た好香有りて、微妙にして常に敷く。観る者、厭ふこと無からん。其の明炎、盛なること称計すべからず。微妙の香、無量無辺ならば、純ら是のごときの無量の諸華を雨ふる。其の雨ふる時に当りて、復た種種微妙音声を出だす。

註

(33) 「法炬」、仏法をいう・仏法が無明長夜の黒暗を照らして滅ぼすのを炬火に譬えた（『中仏』下、一五〇三頁）。

(34) 「法幢」、仏法のこと・仏法を旗に喩えたもの（『中仏』下、一五一四頁）。

(35) 「阿迦尼吒天」→「阿迦膩吒天」色究竟・有頂天・生き物が輪廻する世界の内の最高の場所（『中仏』上、七頁）。

(36) 「曼陀羅華」、色よく芳香を放ち、高潔で、これを見るものを喜ばせると云われる天界の花で、五聖樹の一つ（『中仏』下、一五七五頁）。

(37) 「摩訶」おおきな・偉大な（『中仏』下、一五六一頁）。

(38) 「波利質多華」→「波利質多樹」六月頃落葉し一斉に真紅の花を開き、珊瑚のような観を呈する樹（『中仏』下、一三七〇頁）。

(39) 「曼殊沙華」、白色柔軟で、これを見るものは自ずから悪業を離れるという・天神が意のままにこの花を雨のように降らせるという天界の花（『中仏』下、一五七三頁）。

佛聲・法聲・比丘僧聲・三歸依聲・優婆塞戒聲・成就八戒聲・出家十戒聲・布施聲・持戒聲・清浄梵行具大戒聲・助佐衆事聲・讀經聲・禪思惟聲・觀不浄聲・念出入【十三丁ウ】息聲・非想非非想聲・有想無想聲・識處聲・空處聲・八勝處聲・十一切入聲・定慧聲・空聲・無想聲・無作聲・十二縁聲・具-足聲聞藏聲・學縁覚聲・具足大乘六波羅密（ママ）聲。於（テ）【三四五頁下】其華中（ノノニ）-出（サムキノノヲ）如是等聲-。

《訓》

仏声・法声・比丘僧声・三帰依声・優婆塞戒声・成就八戒声・出家十戒声・布施声・持戒声・清浄梵行具大戒声・助佐衆事[40]声[41]・読経声・禅思惟[42]声・観不浄[43]声・念出入【十三丁ウ】息[44]声・非想非非想[45]声・有想無想[46]声・識処[47]声・空処[48]声・八勝処[49]声・十一切入[50]声・定慧声・空声・無想[51]声・無作[52]声・十二縁[53]声・具足声聞蔵声・学縁覚声・具足大乗六波羅蜜[54]声。其の華の中において、是のごとき等の声を出ださん。

註

(40) 「助佐」→「佐助」助け・援助・助ける・除伴（『中仏』中、五五一頁）。

(41) 「衆事（しゅじ）」、世間の俗事（『中仏』中、七九五頁）。

(42) 「禅思惟」→「禅」瞑想・心の統一（『中仏』中、一〇二三頁）。「思惟」考えること・思考・一つのことを思い続けること・心の中で思う（『中仏』中、七五四頁）。

(43) 「観不浄」→【参考】「不浄観」肉体の汚らわしさを観想して煩悩と欲望を取り除く方法（『中仏』下、一四四一頁）。

(44) 「念出入息」、→「持息念」呼吸法の修練・数息観のこと（anapan-dsmrti）（『中仏』中、六八〇頁）。

(45) 「非想非非想」→「非想非非想処」表象があるのでもなく表象がな

いのでもない三昧の境地・明勝の想はない（非想）が劣昧の想はある（非非想）・粗なる想にあらず細なる想が全くなきに非ざる禅定処（『中仏』下、一三八九頁）。「表象」表れたしるし・表れた姿・現実に感覚を通して知覚されたもの・観念作用または過去の知覚の再生でないもの（『大漢和』十、一七八頁）。

(46) 「有想無想」→「有想」表象作用のあるもの・意識あるもの（『中仏』上、一〇六頁）。「無想」想いなきもの（滅尽定に入った人）・思考のないこと・意識のないもの・心や心の用らきのない境地・心に何ものをも思わないこと（『中仏』下、一六三四頁）。

(47) 「識処」、→「識無辺処」空無辺処を超えて識を無辺であると観ずる禅定・認識作用の無限性についての三昧の境地・外の虚空の想を厭い内なる識を観じ識が無辺であるとの思いをなすこと（『中仏』中、六三六頁）。

(48) 「空処」、（『中仏』上、三一七頁）。→空無辺処

(49) 「八勝処」、八解脱を修した後観想に熟達して自在に浄不浄の境地を観ずること（abhibhv-āyatana）（『中仏』下、一三六二頁）。

(50) 「十一切入」、十一切処→「十遍処」三界の煩悩を遠離すべき一種の禅定・池水火風青黄赤白空識の十通りに無辺無二の観法をなすこと・三界がこれらの十の内の一つに遍満されていると観ずることを順次行なう（『中仏』中、七〇五頁）。

(51) 「無想」、心や心のはたらきのない境地・対象に対する想念が全くなくなった状態（『中仏』下、一六三四頁）。

(52) 「無作」、用らきのないこと・人為的に作られないこと・作為のない事・願い求める何もない・不一致（『中仏』下、一六一八頁）。

(53) 「十二縁」→「十二因縁」縁起の理法を十二の項目に分けたもの・無明・行・名色・六処・受・愛・取・有・生・老死（『中仏』中、七七三頁）。

(54) 「六波羅蜜」、大乗仏教において、菩薩がさとりへ至る六つの道（布施・持戒・忍辱・精進・禅定・智慧）（『中仏』下、一七七八頁）。

色界諸天皆悉聞之本昔所作諸善根本、各自憶念所有不善尋自悔責。即便來下娑婆世界教化世間無量衆生悉令得住於十善中。欲界諸天亦得聞受所有愛結貪恚五欲諸心數法悉得寂靜。本昔所作諸善根本、各自憶念所有不善尋自悔責。即便來下娑婆世界教化世間無量衆生悉令得住於十善中。

《訓》

色界の諸天、皆悉く之を聞きて、本昔所作の諸善根本、各の自ら憶念[55]し、所有の不善、尋で自ら悔責[56]せん。即便ち、娑婆世界に来下して、世間無量の衆生を教化して、悉く十善の中に住することを得しめん。

欲界の諸天、亦た聞受することを得て、所有の愛結[57]・貪恚・五欲[58]・諸の心数[59]の法、悉く寂静なることを得ん。本昔所作の諸善根本、各の自ら憶念し、所有の不善、尋で自ら悔責せん。即便ち、娑婆世界に来下して、世間無量の衆生を教化して、悉く十善の中に住することを得しめん。

註

(55) 「臆念（憶念）」、記憶すること。心に念じてたもつこと・「憶」は憶持「念」は明記不忘（『中仏』上、一六一頁）。

(56) 「悔責（かいせき）」、悔いて自ら責める・非行を悔いて自ら勤める（『大漢和』四、一〇五七頁）。

(57) 「愛結」、妄執の束縛・貪るという煩悩・貪愛の煩悩（『中仏』上、三一頁）。

(58) 「五欲」、世俗的人間の欲望・五つの欲（（五官の貪り・五官の欲望・五官の悦楽・五官による感覚対象に対する感覚的欲望・五種の欲

情・五境を享楽すること）（『中仏』上、五〇七頁）。

（59）「心数（しんじゅ）」、「心所」の旧訳・心の作用（『中仏』中、九五五頁）。

世尊如レ是諸華於虚空【十四丁オ】中一復當二化作一二種種珍寶一。金銀摩尼真珠瑠璃珂貝璧玉眞寶僞寶馬瑙珊瑚天冠寶飾如二雨而下一、一切遍滿二娑婆世界一。爾時人民其心和悅無二諸鬪諍飢餓疾病他方怨賊惡口諸毒一。一切消滅皆得二寂靜一。爾時世界有二如是樂一。若有衆生一見二諸珍寶一爲二觸若用於三乘中一无レ有二退轉一。是諸珍寶作是利益一已還没於地一至二本住處金剛地際一。

《訓》

世尊、是のごとき諸華、虚空の中において、復た当に化して種種の珍宝と作るべし。金・銀・摩尼・真珠・瑠璃・珂貝[60]・璧玉[61]・真宝・偽宝・瑪瑙・珊瑚・天冠・宝飾、雨のごとくして下る。一切、娑婆世界に遍満せん。

爾の時に、人民、其の心和悦して、諸ろの鬪諍・飢餓・疾病・他方の怨賊・悪口・諸毒無からん。一切消滅して、皆、寂静なることを得ん。

爾の時に、世界に是のごときの楽有らん。若し衆生有りて、諸ろの珍宝を見て、為に触れ、若しは用ふる。三乘の中において退転有ること無からん。

是の諸ろの珍宝、是の利益を作し已りて、還りて地に没して、本住処、金剛地際に至らん。

註

（60）「珂貝」、玉の名・くつわ貝（『大漢和』七、九〇〇頁）。

（61）「璧玉」、瑞玉の名・「璧（平らなたま）」と「玉（円いたま）」（『大漢和』七、九七一頁）。

世尊娑婆世界兵劫起時、我身舍利復當化作紺瑠璃珠一從レ地而出上至阿迦尼吒天一雨二種種華一。曼陁羅華・摩訶曼陁羅華・波利質多華、乃至還没於地一至一本住處金剛地際一亦復如レ是。世尊如二刀【十四丁ウ】兵劫一飢餓疾疫亦復如是。世尊如是一大賢劫中我般涅槃後是諸舍利作二如レ是佛事一調二伏無量無邊衆生一於三乘中一得不退轉一。如是當二四於如二五佛世界微塵數等一大劫之中一調伏無量無邊衆生一今二於三一乘一得二不一退轉一。

《訓》

世尊、娑婆世界に兵劫[62]起らん時、我が身の舍利、復た当に化して、紺瑠璃珠と作りて、地より出でて、上み、阿迦尼吒天に至りて種種の華を雨ふる。曼陁羅華・摩訶曼陁羅華・波利質多華、乃至、還りて地に没して、本住処、金剛地際に至らんことも亦復た是のごとし。

世尊、刀兵劫のごとく、飢餓・疾病にも亦復た是のごとし。

世尊、是のごとく、大賢劫[63]の中に、我、般涅槃の後、是の諸ろの舍利、是のごときの仏事を作して、無量無辺の衆生を調伏[64]して、三乘の中において不退転を得ん。是のごとく、当に、五仏[65]世界微塵数[66]等のごとき大劫の中において、無量無辺の衆生を調伏して、

三乗において不退転を得しむべし。

註

(62) 「兵劫」→「刀兵劫」、「小の三災」住劫二十劫中の滅劫の末に起こる三種の災患の第一・中劫の末（人寿）十歳の時の人は（中略）瞋毒増上し相見れば皆猛利の害心を起こす（中略）互いに相残害す（『望仏』二、一五一〇頁）。「刀兵劫（刀兵災）」→「三災」小の三災（世界の存続期に衆生の寿命が八万歳と一〇歳との間で二十期くり返し、人間の寿命が十歳に低下した時交互に起こる災厄（「刀兵災」互いに凶器を以て殺害する・「疾疫災」悪疫が流行する・「飢饉災」飢饉が起こる）の三種。これによって人々が滅びる）（『中仏』上、五七三頁）。

(63) 「賢劫」、賢なる長時間の意・現在の一大劫（常住異滅の四劫）の称・今の世（過去千仏の世を「荘厳劫」・現在千仏の世を「賢劫」。未来千仏の世を「星宿劫」という）（『中仏』上、三九七頁）。

(64) 「調伏（じょうぶく）」、抑制・制御・ととのえ静めること・心身を制すること・身の在り方を正しい状態にととのえ悪を抑え除くこと（『中仏』中、八九四～八九五頁）。

(65) 「五仏」、真言密教の曼荼羅で中央の大日如来と四方の四仏（東に阿男如来・西に阿弥陀如来・南に宝生如来・北に不空成就如来）を指す（『中仏』上、五〇一頁）。

(66) 「微塵数」、無限の数・細かに砕かれたもののように数多い（『中仏』下、一五八〇頁）。

世尊若後満千恒河沙等阿僧祇劫於十方無量無邊阿僧祇餘世界成佛出世者悉是我修阿耨多羅三藐三菩提時、所可教化初發阿耨多羅三藐三菩提心安二住六婆羅密者。世尊我成阿耨多羅三藐三【三四六頁上】菩提已所可勸化令發阿耨多羅三藐三菩提心安止令住六波羅密。及涅槃後、舎利變化所化衆生【十五丁オ】令發阿耨多羅三藐三菩提心者是諸衆生過千恒河沙等阿僧祇劫於十方無量無邊阿僧祇世界成佛出、世皆當称我名字而説讃歎。

《訓》

世尊、若し、後に千恒河沙等阿僧祇劫を満じて、十方無量無辺阿僧祇の余の世界において成仏して世に出でん者は、悉く是れ、我、阿耨多羅三藐三菩提を修せし時、教化すべき所の初めに阿耨多羅三藐三菩提心を発さしめて、六波羅蜜に安住せしむる者ならん。世尊、我、阿耨多羅三藐三菩提を成じ已らんに、勧化すべき所をして、阿耨多羅三藐三菩提心を発さしめ、安止して六波羅蜜に住せしめん。及び涅槃の後、舎利変化、所化の衆生、阿耨多羅三藐三菩提心を発さしむる者、是の諸ろの衆生、千恒河沙等阿僧祇劫を過ぎて、十方無量無辺阿僧祇世界において成仏して、世に出でて、皆、当に我が名字を称して、説き讃歎すべし。

過去久遠有劫。名賢。初入劫時、第四世尊名曰某甲。彼佛世尊勸化我等初發阿耨多羅三藐三菩提心。我等爾時燒滅善心集不善根作五逆罪乃至邪見。彼佛爾時勸化我等令得安住六波羅密。因是即解了切陀羅尼門轉正法輪離生死輪令無量無邊百千衆生安住勝果。復令無量百千衆生安止天人乃至解脱果。

《訓》

過去久遠に劫有り。賢と名づく。初入劫の時、第四の世尊を、名

を「某甲」と曰ふ。彼の仏世尊、我等を勧化して、初めて阿耨多羅三藐三菩提心を発さしむ。我等、爾の時に善心を焼滅し、不善根を集め、五逆罪を作り、乃至邪見なり[67]。彼の仏、爾の時に我等を勧化して、六波羅蜜に安住することを得しむ。是によりて、即ち、一切の陀羅尼門[68]を解了し、正法輪を転じ、生死輪[69]を離れ、無量無辺百千の衆生をして、勝果[70]に安住せしむ。復た、無量百千の衆生をして、天人乃至解脱果に安住せしむ。

註

(67)「作五逆罪乃至邪見」、五逆罪乃至邪見を作るなり（カ？）。

(68)「陀羅尼門」、「門」は法門のことで仏道に入る道のこと・種々の善法を念持する法門。「陀羅尼」仏の教えの精要で神秘的な力を持つと信ぜられる呪文（『中仏』中、一一五二頁）。

(69)「生死輪」→「生死」迷いの世界（『中仏』中、八五五頁）。

(70)「勝果」、勝れた証果・仏果・さとり・仏の境地・（『中仏』中、八三六頁）。

若有衆生求菩提道聞讃歎我已各問於佛。彼佛世尊見何【十五丁ウ】義利於重五濁悪世之中成阿耨多羅三藐三菩提。是諸世尊、即便向是求菩提道善男子善女人説我往昔所成大悲初發阿耨多羅三藐三菩提心荘厳世界及妙善願本起因縁。是人聞已其心驚愕歎未曽有尋發妙願於諸衆生生大悲心。如我無異。作是願言。其有如是重五濁世其中衆生作五逆罪乃至成就諸不善根。我當於中而調伏之。彼諸世尊、以是諸人成就大悲於五濁世發諸善願。隨其所求而與受記。

《訓》

若し、衆生有りて、菩提道を求めんもの、我を讃歎するを聞き已りて、各の仏に問ふ。彼の仏世尊、何の義利[71]を見てか、重五濁悪世の中において、阿耨多羅三藐三菩提を成ずるや。是れ、諸ろの世尊、即便ち、是の菩提道を求むる善男子・善女人に向ひて、我が往昔[72]所成の大悲、初めて阿耨多羅三藐三菩提心を発し、世界を荘厳し、及び、妙善願本起の因縁を説かん。是の人聞き已りて、其の心に驚愕して「未曽有なり」と歎じて、尋で妙願を発して、諸ろの衆生において大悲心を生ぜん。我がごとく、異なること無からん。是の願を作して言はく。「其れ、是のごときの重五濁世に有りて、其の中の衆生、五逆罪を作り、乃至、諸ろの不善根を成就せん。我、当に中において、之を調伏すべし」。彼の諸ろの世尊、是の諸人、大悲を成就するを以て、五濁世において諸善願を発す。其の所求に随ひて受記を与へん。

註

(71)「義利」、道理と利益・利益・現在を益するものを「義」未来を益するものを「利」という（『中仏』上、三〇四頁）。

(72)「往昔」、むかし・いにしえ（『大漢和』四、八一五頁）。

世尊、彼佛世尊復爲修學大乘諸人説我舎利所作變化本起因縁。過去久遠有佛世尊。号字某甲。【十六丁オ】般涅槃後刀兵疾病飢餓

劫起。我等爾時於其劫中受諸苦悩。是佛舎利、為我等故作種種神足師子遊戯。是故我等即得發阿耨多羅三藐三菩提心【三四六頁下】種諸善根精勤修習於六波羅密如上廣説〈已上〉。

《訓》

世尊、彼の仏世尊、復た、大乗を修学する諸人の為に、我が舎利の所作変化本起の因縁を説かん。過去久遠に仏世尊有り。号字[73]「某甲」。般涅槃の後、刀兵・疾病[74]・飢餓劫[75]起りき。我等、爾の時に其の劫の中において、諸ろの苦悩を受けき。是の仏舎利、我等が為の故に、種種の神足、師子遊戯[76]を作しき。是の故に、我等、即ち、阿耨多羅三藐三菩提心を発すことを得て、諸ろの善根を種へ、精勤して六波羅蜜を修習して、上に広く説くがごとし[77]〈已上〉。

註

(73)「号字」、あざな（『字通』五四七頁）。

(74)「疾病」→「疾病劫」、「小の三災」住劫二十劫中の滅劫の末に起こる三種の災患の第二・中劫の末（人寿）十歳の時の人は（中略）非人毒を吐いて疾病流行し（中略）救援すべきこと難し（『望仏』二、一五一〇頁）。

(75)「飢餓劫」→「飢饉劫」「小の三災」住劫二十劫中の滅劫の末に起こる三種の災患の第三・中劫の末（人寿）十歳の時の人は（中略）天竜忿責して甘雨を降らさず、是に由て世間久しく飢饉に遭う。既に支済なければ多分命終す（『望仏』二、一五一〇頁）。

(76)「師子遊戯」、Siṃhavikrīḍitaḥ（獅子曜［師子遊戯］）（荻原雲来『梵漢対訳仏教辞典―翻訳名義大集』丙午出版社、一九二七年）。【参考】『大智度論』（『大正蔵』二五、三九九頁上）。→「師子遊戯三昧」師子が遊戯するが如く無畏自在なる三昧（中略）「師子遊戯とは、譬えば師子の戯るる日は諸獣安穏なるが如く、仏も亦是の如し、この三昧にはいる時、三千大千世界を振動し、よく三悪の衆生をして一時に息を得て皆安穏なるを得しむ」（中略）仏および菩薩は人中の師子にして、能くまたこの三昧力によりて悪道の衆生をして休息を得、皆解脱を得しむることを設けるものなり（『望仏』二、一八一〇頁）。「師子」、獅子・獣中の王であるから獅子王と云い、仏は人中の王であるから獅子に譬えられる（『中仏』中、六五〇頁）。「遊戯（ゆげ・ゆうげ）」、菩薩の自由自在な活動・仏国土から仏国土への移動（『中仏』下、一六九一～一六九二頁）。

(77)『悲華経』（『大正蔵』三、二一一頁下～二一二頁中）。【参考】明恵撰『十無尽院舎利講式』（『大正蔵』八四、九〇五頁上～中）。

依此文證無量無邊衆生、皆依舎利勸化發菩提心乃至成佛。於十方無量無邊阿僧祇世界出世為衆生亦説本縁。非唯、於法滅後為發心因縁。成道後亦爲衆生説舎利勸化本縁即云即得發阿耨多羅三藐三菩提心等。非唯限此劫末調伏衆生。於五佛世界微塵數等大劫中亦復如是。此爲十二部一經也。

《訓》

此の文証によるに、無量無辺の衆生、皆、舎利の勧化によりて菩提心を発し、乃至、成仏せん。十方無量無辺阿僧祇の世界において出世して、衆生の為に、亦本縁を説かん。唯だ、法滅の後において、発心の因縁たるのみに非ず。成道の後も亦、衆生の為に舎利勧化の本縁を説くとして、即ち「即得発阿耨多羅三藐三菩提心」等と云ふ。唯だ、是の劫末に限りて衆生を調伏するのみに非

ず。五仏世界微塵数等の大劫の中においても亦復た是のごとし。此れを十二部[78]の一経とするなり。

註

(78) 「十二部」→「十二部経」仏典（仏の教えの全部）の叙述の形式亦は内部から十二に分類したもの（『中仏』中、七七五頁）。

是時亦可下【十六丁ウ】有中隨レ機一聞浄土行一得二往一生衆生上。是故二家ノ義、俱非レ無二発心一勝縁一也。若有レ発心一者ハ聞法得道亦不レ疑。是故ニ止住百歳等ノ文亦約スルニ経道ノ興廃一一途ノ説也。更非四謂ニ約サルトニハシテ人機一無ニ如レ此ノ諸門一也。又前所説ノ宿成堅種三途聞教海水劫火不能為障等ノ義此中ニシ可一(ママ)廣説一。

《訓》

是の時も亦、機に随ひて浄土の行を聞きて、往生を得る衆生有るべし。是の故に、二家の義[79]、俱に発心の勝縁無きに非ざるなり。若し発心有らば、聞法・得道も亦疑はず。是の故に「止住百歳」等の文は亦、経道の興廃に約する一途の説なり。更に人機に約して、此のごときの諸門無しと謂ふとには非ざるなり。又、前の所説[80]の「宿成堅種[81]三途聞教[82]」・「海水劫火不能為障[83]」等の義、此の中に広く説くべし。

註

(79) 「二家義」、刀兵劫時・『法住記』所説刀兵劫後（『群疑論』［『大正蔵』四七、四八頁下～四九頁上］）。

(80) 「前所説」、『摧邪輪』巻中、十一丁オ～ウ。

(81) 「堅」、不退の人・まこと・安定していること（『中仏』上、三九〇頁）。

(82) 「宿成堅種三途聞教」、澄観『華厳経行願品疏』（［以下『行願品疏』とする］『卍新纂続蔵経』五、六八頁上）。【参照】明恵『華厳修禅観照入解脱門義』（［以下［解脱門義］とする］『大正蔵』七二、八六頁上）。

(83) 「海水劫火不能為障」、『行願品疏』（『卍新纂続蔵経』五、四九頁中）。【参照】『解脱門義』（『大正蔵』七二、八六頁上）。

若如ニ汝所解一者ハ止住百歳後ノ不レ可レ有ニ往生浄土ノ因縁一。若信ニ如レ此ノ等ノ文理一者ハ未サル三必シモ可ニ限執スカラリ一也。汝説チテ此邪義ヲ授ルカニ所化一故ニ如クナルノ虫之若女如クナルノ泡之少童皆悉クス撥ニ大聖ノ本意ヲ一。雖トモ不レ知ストラル有レ憑者ハレ是為ストラル器ニ。善種終ニ可シ開発ス一。汝皆ニ將ス三抑ヘムトニ之ヲ一。苦シキ乎カナヤ、痛キ乎カナヤ矣。

《訓》

若し、汝が所解のごとくならば、「止住百歳」の後は、往生浄土の因縁有るべからず。若し、此のごとき等の文理を信ぜば、未だ必ずしも、限り執すべからざるなり。

汝、此の邪義を説きて所化に授くるが故に、虫のごとくなる若女、泡のごとくなる少童、皆悉く大聖の本意を撥す。知らずと雖も、憑み有るは、是れ器とす。善種、終に開発すべし。汝、皆、将に之を抑へんとす。苦しきかなや、痛ましきかなや。

又如ニ前説一。正像末三時多ク約シテ證行ノ興廃ニ説ク。然ニ聖教ノ大綱ハ【十七丁オ】正為ニ鈍為等五為、皆ナタリ為本意一。悉ク皆成スルカニ果道ヲ一故ニ。然ニ此結縁徳ノ設ハヒトモ雖四不ス三

生解而能信向、以成堅種。如食金剛、終竟不銷。設因餘過、墮於三途、聞経信力速能證悟。故地獄天子因光生天、三重頓圓十地功徳。深有信欲、海水劫火不能爲障。

《訓》

又、前に説くがごとし。正像末の三時は、多く「証行の興廃」に約して説く。然るに、聖教の大綱は、正為[84]・兼為[85]等の五為[86]、皆本意たり。悉く皆果道[87]を成ずるが故に。

然るに、此の結縁の徳は、設ひ解を生ぜずと雖も、能く信向[88]すれば、以て堅種を成ず。金剛を食するに、終竟、銷[89]ぜざるがごとし。

設い、余過によりて三途に堕つとも、聞経の信力、速やかに能く証悟す。故に、地獄の天子、光によりて天に生じて、三重に頓に十地の功徳を円にす。[90]深く信欲有れば、海水劫火も障を為すこと能わず。

註

(84)「正為」、【参考】法蔵『探玄記』「一正為者謂是一乗不共教中普機菩薩正是此経所為之器」（『大正蔵』三五、一一七頁上）。

(85)「兼為」、【参考】法蔵『探玄記』「二兼為者謂遺法中見聞信向此無尽法成金剛種当必得此円融普法」（『大正蔵』三五、一一七頁上）。

(86)「五為」、【参考】法蔵『探玄記』「二顕所為中五者一正為（中略）二兼為（中略）三引為者（中略）四転為（中略）五遠為」（『大正蔵』三五、一一七頁上～中）。

(87)「果道」、果徳に通入する道路（『摧邪輪』中、三丁オ参照）。→「果徳」、結果にそなわった功徳（『中仏』上、二一八頁）。

(88)「信向」、三宝を信じて疑わず、これに帰依すること（『中仏』中、九四七頁）。

(89)「銷（しょう）」、とかす・とける・ちらす・ほろびる・ほろぼす・つきる・そこなう（『大漢和』十一、五四七頁）。

(90)「三重頓円十地功徳」、【参考】『華厳信種義』（『大正蔵』七二、七二頁上）。『解脱門義』（『大正蔵』七二、八六頁中）。

（よねざわ　みえこ　嘱託研究員、浄土宗総合研究所嘱託研究員）